

かけはし

CRI

中国国際广播电台日本語部

2009年5月20日 2009年春号

E-mail: nihao2180@cri.com.cn

http://www.cri.cn

http://japanese.cri.cn



住所: 中国北京市石景山区石景山路甲16号

中国国際放送局日本語部

郵便番号: 100040

電話: 86-10-68891987

86-10-68891975

FAX: 86-10-68891951

CRI

中国国際放送局日本語部

2009年春号 5月20日刊行

編集: 王秀閣 黄恂恂

春のピクニック「清涼谷」

文・写真 馬 健

北京密雲県の風景の美しいところと言えば、「黒竜潭」と「京都第一滝」が有名なところだが、隣接している「清涼谷」自然風景区を知っている人はあまりいない。



4月23日、霧雨の日だった。日本語部の現職スタッフと定年になった先輩たちが春のピクニックで、密雲県の石城郷の賈峪村に位置している「清涼谷」自然風景区に行ってきた。遠くを見まわすと、山は幾重にも重なっていて、古い木が空高くそびえている。みんなが峡谷の入口に立っていると、そよ風が顔をなで、ますますすがすがしく感じた。この「清涼の世界」の誘惑を拒

めず、旅行の疲労にもかかわらず、峡谷の中に急いで入った。狭く曲がりくねった小道は重なり合っている連山の中にあった。私たちはガードレールがある小道にそって、濃厚な緑の林の茂みを通り抜けて、雨後のすがすがしい空気を深呼吸して、のびのびしていた。しばらく行くと、峰が曲がり、道がくねる。小溪、滝、潭水が目に入った。これは峡谷の一つ目の滝——「迎仙滝」（神様を迎える滝）、一つ目の潭——「清心潭」（後悔なしの心をもつ潭）である。私は「清心潭」から3メートルほどの巨大な石に跳び上がって、霧雨にいたる心地よさを満喫した。潭の辺に近づいてみると、潭水は透き通って輝き、こまごました物が少しもなかった。雨の水玉が水面に落ちて、さざ波がひっきりなしに外へ広がっていった……。吊り橋を通った。山道はますます急になってきた。遊覧

者の安全に念を入れて、風景景区管理所は坂の急なところに棧道を修築している。遠くの山を眺めてみると、山の峰がまるで空に横たわる竜のように、また雲をつきぬけた矢のようにそびえている。私はここにいる、騒がしいことは一切なく、流水の音しか聞こえなかった。一方、ここには雑事もなく、いろいろな紛争からも遠ざかって、快適で和やかな気持ちだけを感じていられる。そして、疲労、苦悶、困惑を一掃し、のびのびした気分になった。「今はこのまま恒久に向けて、人(世)と争いなしの世界にずっといられることになればいいな」と思った。「清涼谷」の美しい景色がみんなに不思議な力を与えたのかもしれない。私たちは一番高い潭——「垂錦潭」に登って、最後の滝——「楽仙滝」を觀賞したが、「もう疲れた」と言う人は一人もいなかった。みんなは大自然の恩恵を十分に享受していた。



行く人来る人



3月に、CRI・中国国際放送局日本語部の副部長に就任した姜平(きやうへい)です。番組作りにほぼ10年間携わってきましたが、このたび管理職に就いてから自由自在に取材できず、ちょっと不自然に感じている今日この頃です。1999年8月に入局した私は、「キャッチ・ザ・北京」、「スポーツ中国」などのパーソナリティーを務めました。2008年5月から6月にかけて、中国国際放送局の特派員として四川大地震の被災地へ赴き、1ヶ月ほど現地取材を行ってきました。四川に滞在中、電話リポートの形でNHKの「ラジオ朝一番」に出演しました。今度、副部長として、CRIの日本語版ホームページの運営を担当することになりました。ぜひとも、中国国際放送局の日本語版ホームページ(<http://japanese.cri.cn>)をご利用ください。



私は劉非(りゅうひ)です。入局して13年目、上司や部下の支持をいただいて、日本語部の副部長になりました。この13年間、私は日本語部の先輩たちによって育てられたと言えます。その中でも一番印象深かったことは大先輩・添田修平先生について、アナウンサーの訓練を受けた一年間です。今日、メディア融合の背景の下で、日本語部はラジオの特色を生かしながら、いかに時代の流れに対応していくかが大きな課題だと思います。先輩たちが長年積み重ねてきた良き伝統を維持しながら、リスナーの皆様の知恵を拝借し、さらにインターネットの利便性をも生かして、「今日の中国」、「真実の中国」を日本のリスナーの皆様に伝えていくのが、われわれ日本語部のスタッフの目標だと考える次第です。



謝宏宇(しゃこう)です。リスナーの皆様にご報告申し上げます。日本語部部長の私は局の人事異動で8月から東京支局に赴任することになりました。長い間、リスナーの皆様にはいろいろご支持をして頂いて、心から感謝の意を申し上げますと共に、これからの東京支局での仕事、何かとご迷惑をおかけするとは存じますが、引き続きよろしくお願ひ申し上げる次第です。CRIは中日両国の間にかかった重要な架け橋であり、緊密な絆だといえます。私は、マスコミに携わるものとして自分自身が問題を正しく理解し、認識することに努めるほか、声・文字・映像などさまざまな表現方法を使って、伝達のルートも含め情報を有効的に速やかにリスナーの皆様へ伝えることをしっかり考えていきます。これからもどうぞよろしくご指導、ご鞭撻のほどお願いいたします。ありがとうございました。



皆様、こんにちは。王丹丹(おうたんたん)です。4月15日に中国国際放送局日本語部を円満に終え、5月より同放送局の人事部に勤務しております。国際放送局に入社して12年にわたり日本語の放送に携わってきました。これまで、記者、アナウンサー、「おしゃべりスタジオ805」、「ミュージックステーション」、「文化マガジン」、「スポーツ中国」など番組のキャスターを歴任してまいりました。2001年から2003年まで、中国国際放送局特派員として東京に駐在した経験もあります。2005年4月から日本語部副部長に任命されました。新任部署におきましてもこれまでの経験を生かして努力してまいりたいと思います。今後とも皆様の一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

編集者の言葉



リスナーの皆様、こんにちは。少し遅れてしまいましたが、春号の「かけはし」を皆様のお手元にお届けします。「かけはし」は春、夏、秋、冬の4期にわたって発行していますが、今年はちょうど中国が建国して60周年を迎えるため、この60年間の中国社会の変貌について、身近なことを中心にして、1年を通して振り返ってみたいと思います。また、今期から遊び心を込めて、2つのコーナーを新設しました。1つは、「言葉で遊ぼう」で、今の流行語や新しい中国語をご紹介します。もう1つは、「我が家の台所」で、日本であり知られていない美味しい中華料理のレシピを載せています。皆様どうぞご期待ください。なお、北京放送局ではリスナーの皆様のご意見、ご希望をお待ちしています。ぜひお便りを riyubu@cri.com.cn までお寄せください。ではスタッフ一同、皆様のご健康をお祈りいたします。



「長野県北京放送を聴く会」「中国語を学ぶ会」から贈られたサクラ

2009年4月2日撮影

四季の漢詩

春江水暖鴨先知

chūn jiāng shuǐ nuǎn yā xiān zhī

(宋代詩人・蘇軾『惠崇春江晚景』第2句)

「鴨」という字は中国で「あひる」を指し、「かも」ではない。「春江の水暖、鴨先に知る」(春になって川の水の温むのを、アヒルが人より先に知る) 大自然の季節の変化を水鳥に託して詠じる、伝統的手法。それにしても春を賛美した詩として何かユーモラスな趣がある。それは「鴨が人より先に春の到来を知る」といった表現に表れている。中国北方では長い冬を耐え、待望の春の到来に人々の心が弾むのを隠すことなく詩に詠じたものと言える。ここには誰でも共感を覚える普遍性がある。

建国60周年特集：日本語放送物語

編集者から

今年、中国は建国60年と改革開放30年の節目を迎えました。この60年間に中国の人々は戦争から立ち直り、中国は世界で注目される経済大国になりました。北京五輪の成功や2010年に開催を控えた上海万博は、中国の変化と発展の象徴だと言えます。この60年間私たちCRI日本語放送も、国の発展と共に今日まで歩んできました。1941年の戦時に延安から発せられた初のコールサインから今日まで、日本語部には言い尽くせない物語があります。この節目の年に、私たちはこの小新聞「かけはし」を通じてみなさんと共に日本語部の歩みを振り返ることにしました。第一回目の今回はCRIと日本語部の誕生についてのお話です。

黄恂恂



CRIの史料展示室

第一話 CRIの誕生と急速成長

・CRIの誕生、延安から日本人女性が放送

日本語放送の歴史は、新中国の建国前に始まります。

「こちらは、延安新華放送局です」

1941年、戦火の中で革命の本拠地だった延安から発せられたこの声が、中国人民対外放送のはじまりでした。アナウンサーを務めたのは日本人女性の原清志（本名、原清子）さんでした。CRIの放送は中国語でも英語でもなく、日本語からスタートしました。



放送局誕生の地

延安新華放送局は延安市街から西北へ20キロ、王皮湾という小さな村にありました。交通が不便なため、放送局のスタッフたちは毎日馬で通勤していました。茂った藁の林の中、一本のトンネルで繋がった二つの「窯洞」（西北部でよく見られる人が掘った洞窟式住居）が放送局の局舎でした。一つの「窯洞」は、アナウンサーが原稿を読み合わせる休憩室で、木製の机とベッド、電話機しかありませんでした。もう一つの「窯洞」は簡易のスタジオで、床と壁に現地の人々が編んだじゅうたんが敷かれていました。スタジオには、木製の机とベンチの

ほか、一本のマイクしかなかったのです。しばらくしてから、スタジオの機材には、手巻きのぜんまい式蓄音機と20枚ほどのレコードが備え付けられました。当時の放送局の出力はわずか300ワットで、中古車のエンジンを改造した発電機に頼って送信を続けていました。放送の波長は24.5メートル、毎週水曜日の17:00から17:30の30分間だけ放送しました。こうした粗末な環境で誕生した延安新華放送局は、CRI日本語部の前身、そして中国の海外放送の先駆となったのです。

・50年代の急速成長

1949年6月20日、10月の中華人民共和国の建国を前に、一たん途絶えた日本語放送が復活しました。放送局の場所は延安から北京市の復興門に移り、北京の目抜き通りである長安街沿線に立てられた立派なビルに移りました。番組の内容は、新華社や『人民日報』の内容を日本語に訳して放送し、ニュースや論説などやや硬い内容でした。



年代の放送機器

1953年、放送局は「国際主義を目的に、各国人民との友好を強固にし、各民族間の友好協力を促進し



て、平和と民主を守ることにその力を尽くす」という新しい方針を打ち出しました。この頃から、日本語放送の内容に変化が現れます。新華社などから得た情報を直訳で流すのではなく、日本のリスナー向けに必要な部分を削除したり、説明を加えたりする工夫を凝らしました。

この頃になると、スタッフの人数も増え、ニュースや論説以外に自分たちで取材した文化や音楽などのソフトな番組を放送するようになりました。当時の様子を知る日本語部のOB蘇克彬アナウンサーは、中国の人々の普段の暮らしをテーマにした番組が特に好評だったと振り返ります。

・日本から初のお便り

こうした中、日本のリスナーから初めてのお便りが届きました。中日が国交正常化を実現する前の時代で、東京から送られたその手紙はシンガポール、香港を経由し、数ヶ月もの時間をかけて日本語部にたどり着いたのです。その手紙にはこう書かれていました。

「ラジオからみなさんの声が聞こえました。放送を聞いて、中国の大地で人々が楽しく暮らし、自分の国家を建設することに日々励んでいることを知りました…」

この手紙を目にした日本語部スタッフ全員

は、言葉にならないほどの大きな励みを得ました。その後、リスナーからのお便りは段々と増えていきました。1949年の放送再開から1年でお便りは43通に、そして80年代までに一番多いときは年間8万通のお便りが届きました。

建国の日に使われたレコーダー



この流れの中で、1954年以降はリスナーからのお便りを紹介する番組が誕生しました。また、『中国の景色』、『中国の舞台』、『子ども番組』などの番組を定期的に放送するようになったのもこの頃からでした。この時、放送時間は2時間15分まで延長されました。

1956年、日本語部のスタッフ数は30人まで拡大され、日本で暮らした経験がある華僑スタッフを中心に日本のリスナー向けの番組作りを模索しました。彼らはリスナーの嗜好を研究した上で、「短くてわかりやすいニュースとエンターテインメント番組の充実」を目標に追及しました。これは、今日でも日本語部で重視され続けている目標です。

私たちの日本語放送は、リスナーのみなさんや日本人の専門家など色々な人に支えられて、今日まで歩んで来ました。次号も引き続きこの日本語放送物語をご期待ください！

（夏号につづく）

北京放送の第一声

■ 孫建和(姜平訳)

1941年12月3日に放送を始めた中国国際放送局の初のアナウンサーは、原清志（本名、原清子）という29歳の日本人の女性でした。

原清志さんは東京生まれで、青年時代、日本共産党に入党し、中国人の留学生と結婚しました。抗日戦争勃発後、中国



原清志さんが使用した辞典

を初めて訪れた原清志さんは、中国共産党の八路軍に加わり、その後根拠地の延安に設けられた「延安新華広播電台」（延安新華放送局、中国国際放送局の前身）で働くことになりました。

原清志さんは日本の貧しい家庭に生まれ、物心がつかないうちに父親に死なれ、15歳で、母親にも病気で死なれてしまいました。18歳の時、原清志さんは革命に携わっていた日本人の男性と結婚し、一人の子供を生みました。23歳の時、この夫は当時の日本政府に迫害され、病気で亡くなりました。のちに、彼女はが早稲田大学に留学中の中国人の留学生と知り合い、再び結婚しました。大学を卒業した夫は帰国し、落ち着いてから原清志さんを中国に迎え入れる

と約束しました。

しかし、1936年に西安事変が起き、「戦争時の混乱した中では人探しは難しい。ご主人の知らせを待たずに早く中国に行ったほうがいい」という中国人の留学生のアドバイスを聞いて、原清志さんは1937年3月に子供連れで中国を訪れました。原清志さんは子供をご主人の実家に預け、夫婦二人で八路軍に加わりました。



抗日戦争の最も激しい時期に、彼女は

病弱の体で戦争下の日々を暮らし、命を懸けた毎日を過ごしていました。1941年、八路軍の朱徳総司令官は原清志さん夫婦を八路軍の本部に人事異動させました。夫婦は1941年10月に、延安で放送開始の準備作業に携わり、12月3日に日本語放送の第一声を送信しました。同年、原清志さんは中国共産党に加入しました。

1996年の初夏、84歳の原清志さんは北京市の復興門外大街にある中国国際放送局を初めて訪れました。その後、2000年2月、88歳の彼女は再び北京の西部郊外に引越した中国国際放送局の新局舎を訪れています。

2000年10月18日、89歳の原清志さんは中国東北地方の瀋陽市で亡くなりました。

頑張ろう！四川！

この1年間、辛いことがいっぱいありましたが、世界中から温かい支援の手が差し伸べられました。私たちは、人間の目が体の前にしかないのと同じように、ひたすら前に向かって進みます。



四川取材して

安藤 直子

初めまして。この『かけはし』には初登場となりますが、去年の夏からCRIでお世話になっている安藤といいます。先日、「中国人記者・外国人記者四川行き」と題したCRIの四川大地震取材団に参加して、震災後1年の様子を取材してきました。取材内容は番組やホームページに譲るとして、ここではちょっとした裏話を一つ。この取材、唯一の休息時間は食事というほどタイトなスケジュールでしたが、ここは辛いことで有名な四川料理

の故郷。辛いもの大好きという私に対し、同行した関アナウンサーが大変。彼は北京で育ったのに辛いものが苦手、私が先に一口食べてから、「辛くない？」と確認してから食べていました。そんな我々を周りの中国人スタッフは不思議そうな目で見ていましたが……。

被災地で出会った人々の表情は明るく、頑張っている姿勢が印象的でした。世界遺産の都江堰では観光客の受け入れも再開しているので、皆さんも次に中国へ来る機会があれば四川まで足を伸ばしてください。それが被災地の復興にもつながります。

東京藝術大学、箏で日中韓文化交流を促進

日本語部の旧友で東京藝術大学の箏博士である毛Yさんはこの春、「アジア芸術宣言」の交流で、東京藝術大学の教授らと共に中国を訪れました。

毛Yさんをはじめ、東京藝術大学・音楽学部の安藤正輝教授や植村幸生教授、安藤珠希博士、調律専門家の須田日出男さんらが北京と上海の音楽大学で日本の箏曲について講演を行い、東京藝術大学が中心となって進めている「アジア芸術宣言」を紹介しました。

「アジア芸術宣言」とは、東京芸術大学（学長：宮田亮平）によって提唱されたアジアの文化交流を促進するプロジェクトです。去年の夏から今まで、主に箏を媒体に日中韓3カ国で箏曲演奏の音楽交流が行われて来ました。

この夏には、中国と韓国からの学生が東京芸術大学の招待で日本を訪れ、日本の箏について学ぶことになっています。



静かな日々を取り戻した北川中学校 関亦永

4月28日、日本でも広く知られている北川中学校を訪問しました。北川中学校といっても場所は綿陽市にある长虹集団培训中心の中に建てられた仮校舎です。

新校舎の建設は今年5月から始まる予定ですが、校舎再建に先立って、学校側は生徒のメンタルケアを優先的に進めているようです。そんな中、ボランティア教師による音楽や美術などの授業が注目を浴びています。校内の音楽教室でボランティア教師としてやってきた首都師範大学音楽学院の3年生・張竹君さんに出会いました。午前中は授業がなく、張さんは一人でピアノの練習をしていました。なんだか覚えのあるメロディーが流れてきたので、よく聞いてみると、なんと日本の「桜」でした。張さんの話によると、この音楽支援計画は、数ヶ月前からすでに始まっているということです。毎月新しい教師が交代で来るわけですが、今回は彼女を含めて8人の教師が派遣されてきました。

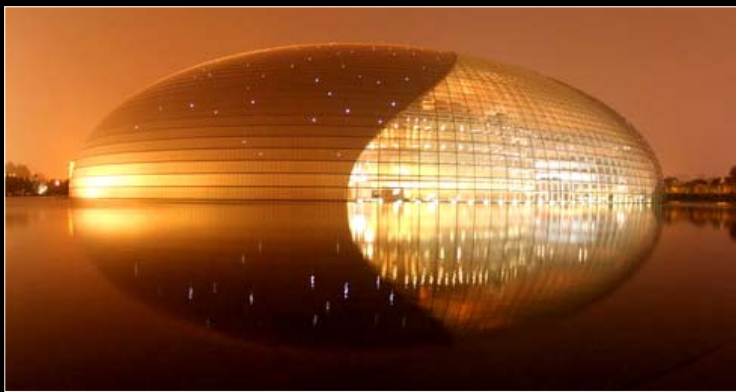
張さんは音楽教師というより「音楽セラピスト」と言っても過言ではありません。音楽の知識を教えると同時に、いかにして音楽を通して、地震で傷ついた生徒たちの心を癒せるのかを考えなければならないと言います。「音楽は人を変える」。音楽によって心を癒された生徒たちをこの目で見た張竹君さん。ここでの授業を通して



食堂へ猛ダッシュ！

「音楽は人を楽しませるものだけでなく、人と人の絆でもある」ということにも気づきました。

音楽教室を後にすると、ちょうどランチタイム。生徒たちは、空の弁当箱や茶碗を手に食堂へと猛ダッシュする光景がとても印象的でした。その勢いは、まるでランナーがラストスパートしているかのようでした。食堂が狭いので、食堂でもらった料理を教室に運んで食べるのがランチタイムのルールです。しばらくすると、一足先に食堂に着いて、おいしそうな料理を弁当箱や茶碗いっぱいに盛った生徒たちが、ダッシュする生徒たちの流れと逆方向に、ゆっくりと歩いてきました。その風景は非常に対照的でした。弁当箱の中を覗いてみると、さすがは四川、辛そうな料理ばかり。「おいしいですか」と聞くと、「とってもおいしい」と誰もが幸せそうな微笑を浮かべていました。



国家大劇場

「外国人が写した北京」コンテスト 作品を募集中

中国建国60周年を祝うため、「外国人が見た北京・写した北京」という写真コンテストが開催されます。応募作品の締切りは7月10日までで、外国人の方ならどなたでも応募できます。審査には専門家グループがあたり、第1次選考で全応募作品の中から400点を選出、その後の最終審査で選出された50点が入賞となります。入賞作品には賞金が授与されます。詳細は当中国国際放送局のホームページをご覧ください。



万里的長城



北京の「足」



小さな応援団長

カナダのLance Mcmillanさんの応募作品

言葉で遊ぼう

結婚にまつわる言葉



馬健さんは5月に結婚しました！

相亲 (xiāng qīn)

お見合い（する）。“相亲会”はお見合いの会合のこと。親同士が子供の代わりに写真や資料などを持って公園などで結婚相手を見つける“相亲会”が一つの流行に。

閃婚 (shǎn hūn)

電撃結婚。ちなみに、“闪电”は稲妻のこと。

奉子成婚 (fèng zǐ chéng hūn)

できちゃった結婚。未婚の母、父、仕方なく結婚？

婚纱摄影 (hūn shā shè yǐng)

“婚纱”とはウェディングドレスのこと。ウェディングドレスやチャイナドレス、さらに日本の和服もあるが、スタジオで様々な衣装を着て撮影し、記念アルバムを作るのが結婚するときに欠かせないプログラムの一つになっている。最近では中年の

人も“婚纱摄影”をする。彼らの若い時はこんな贅沢なことはできなかったから？

交杯酒 (jiāo bēi jiǔ)

新郎新婦がそれぞれ杯を手にし、腕を組んでお酒を飲むこと。二人がいつまでも仲良くするようにという願いが込められて、結婚式に“喝交杯酒”のプログラムがよくある。

中国では離婚も多いですが、そんなことに絶対ならないようにという願いがこもっているかも。



中国の結婚式招待状。縁起のいい赤がほとんど

中国初のアナウンスコンテスト開催

■ 胡徳勝

4月3日、第1回CRI-カシオ杯、大学生アナウンスコンテストが中国国際放送局で行われました。私は大会の司会者として、今回のアナウンスコンテストに参加しました。ここでその感想を簡単にご紹介したいと思います。

コンテストの予選は去年末ごろから始まっていました。北京の17の大学と天津外国語大学から合計28人の代表が参加しました。審査はリスナーのインターネット投票と、CRI中国国際放送局のアナウンサーによってなされました。

コンテストは2段階に分けられ、第1段階では、選手らに同じニュースを読んでもらい、審査員は選手たちの発音と表現力に対して点数をつけました。第2段階では、抽選で読むニュースを決め、ニュースを読み上げた後、審査員と一問一答を行いました。この総合成績によって、選手の順位が決まりました。結局最後の優勝者は、北京外国語大学2年の袁典さんでした。

私たちはこのイベントで最も印象に残ったことが2点あります。

まずは、選手たちの日本語レベルの高さです。文章をよく理解し、美しい日本語でニュースの内容を伝えることが出来ました。というのも、いまの大学生は以前と違って教科書ばかり勉強するのではなく、日本人の友達と会話の練習をしたり、日本に関する様々な活動の機会も多いです。また、大学在学中に日本に留学する人も多くなっています。今回の選手たちもほとんどはこうした留学経験者でした。

次に、コンテストの運営について反省するところも多かったです。イベントを開催するのに慣れていないこともあって、事前に念入りに準備したつもりでも、本番になると、思いがけない問題が次から次へと出てきました。例えば、授賞式の際、選手らを案内するメンバーが事前によく統一されていなかったため、選手らがステージに上



がる順番と立つ位置が分からなくて混乱しました。こうした経験は、今後のイベントに生かせると思います。

こうして第1回大学生によるアナウンスコンテストが無事終了しました。次回はさらに盛大に開催し、より多くの優秀な選手に参加していただきたいと思います。私たちも微力ながら、準備をよくし、仔細な計画の下、このコンテストを盛り上げていきたいと思っています。

ニューフェイス



黄恂恂(コウ・ジュンジュン)

幼い頃からの夢は一流のジャーナリストになることでした。日本の一橋大学に留学していた時は学生新聞の記者を務め、日本人の仲間とネットラジオ番組を作ったり、北京五輪期間中には日本語部でインターンとして働き、重要な事件や大切な瞬間を伝えることが出来るこの仕事の面白さに惹かれました。入局してから半年、今はネットラジオ・アナウンサーとしてホームページの番組作りや当局の新聞「かけはし」の編集などを担当しています。年は23歳で一番若いですが、早く一人前として認められるよう頑張ります！

万兵(マン・ペイ)



27歳の北京っ子です。2000年、北京科学技術大学日本語科を中退して、日本に留学しました。2002年3月まで、福岡で日本語を学び、その後、大阪府の追手門学院大学で学びました。専門は国際経済です。大学院は同大学の経済研究科でした。今は主にニュースの翻訳を担当しています。

楊思嘉(ヨウ・シカ)



高校生の時、織田信長という男に惚れ、もっともっと彼のことを知りたくて、日本語の勉強を始めました。私は今、中国の「国粹」と呼ばれる京劇が大好きです！京劇は中華文化を代表する伝統劇で、豪華な服装と舞台、優雅な姿と身振り、深い深い中華の伝統文化を内包しています。皆様、どうか私と共に京劇をご覧になってください。

担当が変わりました！

注目の新番組・レギュラー番組

『経済直行便』

(火曜日 17分 担当者: 齊鵬・吉田明、王小燕・大澤慶子)

難しい経済問題を分かりやすく解説し、誰が聞いても分かるような番組を作っていきます。激動するいまの中国を経済の視点から見ずえてみたいと思っています。リスナーの皆様、一緒に「経済直行便」に乗って中国経済の旅に出てみましょう。

『文化マガジン』

(月曜日 12分 担当者: 王秀蘭)

5月に番組がリニューアルされ、週ごとに「今月のベストセラー」「今月のステージ」「今月の人」「今月の食卓」をテーマ別に、人気の本や雑誌、上映中のお芝居や劇、ミュージカル、そして芸能人、中国食文化と中華レシピの紹介など盛り沢山の情報をお届けします。

ネットラジオのフリートーキング番組『つばめのス』

(担当者: 王小燕等)

昨年末、HPのリニューアルに伴ってスタート。これまではグルメ、海外旅行、映画鑑賞、就職活動、地下鉄、携帯電話、トイレなど…とことん日常生活に密着したネタで展開。中国人と日本人出演者の掛け合いで、ここ30年来の中国社会の変化、中でも中国人のものの考え方、また、日中の違いなどを伝えられればと願っています。

『北京の表情』

(担当者: 黄恂恂等)

王小燕アナウンサーと2人を中心に内容を毎週更新しています。趣旨は、CRI日本語部スタッフの目線から皆さんに、人の表情と同じ様に刻々と変化する四季の北京を文字や写真、映像など様々な方法でご紹介することです。北京に暮らす者として、自分の目で見、耳で聞き、肌で感じることを皆さんに伝え、北京の日々と皆さんの生活との距離を可能な限り縮めることを目指していきます！

リスナーからの投稿とお便り

埼玉県川越市 織戸久一郎様

私は退職して老齢年金で生活しています。老後が不安のため、報酬は少ないですが市役所の公報を配る仕事をしています。私は殻つぶしではない、世の中の役に立っているのだ、生涯現役だと思っていますが、雨の日や雪の日はやはり大変辛いです。それに一人暮らしなので寂しいです。そんな生活なので、北京放送を聞いたり、貴局より手紙を送ってもらくと、元気が湧いてきます。

徳島県鳴門市 山口昌彦様

3/23(月)放送の「中国昔話」は、私が最も敬愛してやまぬ「詩仙」李白の話だったので、いつもに増して、楽しく聴かせていただきました。

それにしても、酒を飲まなければいい詩を書くことが出来ないとは、ジャッキー・チェン(成龍)主演の大ヒット映画「酔拳」(ドラク・モンキー)を地で行くようなお話しですね。もしかして、ソカシ(酔拳の達人の老師)のモデルは、李白！？

東京都練馬区 甲斐基文様

ようやく大学も春休みに入り、自分自身の研究を進めながら、夜はのんびりとラジオを楽しむ時間がとれるようになりました。最近貴局の放送は、様々な言語で受信出来るようになりました。私が理解できる英語、フランス語、イタリア語等の放送も極めて良好な受信状態で聴くことができますので、毎日違った言語で楽しんでおります。

世界の日本語短波放送の規模がかなり縮小されている中、深夜0時を過ぎてから放送をやっているのが貴局だけになりました。国内の民間放送は若者にターゲットを絞った番組作りをしていて、我々中年には楽しめない構成になっています。深夜に楽しめる数少ない番組ということで、いつも楽しみにしています。

卵とトマトの炒めもの 我が家の台所

材料(4人分)
卵…………… 4個
完熟トマト…… 2個
塩…………… 少々
サラダ油………… 大さじ4
砂糖…………… 小さじ1

- 1) トマトは湯むきをし、へたをとり、1口大の乱切りにする。
- 2) ボールに卵を割りほぐし、少々塩を入れて掻き混ぜ、卵液を作る。
- 3) 少し多目に油を鍋に入れて熱し、卵液を流し入れ、軽く混ぜ混ぜのような感じで炒め、鍋から出しておく。
- 4) もう一度鍋に油を入れて、加熱し、トマトを入れて炒める。
- 5) トマトから汁が出てきたら炒めた卵を入れ、炒め合わせる。塩と砂糖を適宜に入れて出来上がり。

ポイント

これは中国のごく普通の家庭料理です。卵を炒めるときのサラダ油を多めに使ったほうが卵が柔らかくできます。卵液の2/3の量の油を使う人もいます。また、卵とトマトの新鮮な味を出すためには、シンプルに塩だけで味付けするのもコツです。

